

## 新・下野市風土記

## 冬と春を分けるもの



下野市教育委員会 文化財課

## 季節の語源

今も昔も、2月は1年の中で1番寒い時期です。古代の人々も、すぐそこまで来た春を待ちわびたことでしょう。

「春」の語源には、植物の根が大地に「張る」、暖かくなって曇天が青空になり「晴れる」、田畑を「墾る」など、諸説あります。

同様に「冬」の語源にもいくつかの説があります。「冷」が転じたという説、寒さが猛威を振るうの「振う・振ゆ」が転じたという説、そして、「殖ゆ」が転じたという説。

中でも「殖ゆ」は、少し意味深です。

冬の寒さや日の短さ、暗さは、どちらかとい

うとマイナスのイメージをもたらすのでしょうか。原始古代の人々は、冬になると植物が枯れることと、人々の死を結び付けたようで、冬に亡くなった祖先の魂が、冬が去って春になると、分割して「殖える」=冬(殖ゆ)となったようです。そして、春は再生の季節=青春となります。

## 豆知識

古代の青は、現代の色彩でいう青と緑の両方を指したようです。

「東の飛鳥」は高松塚古墳などに描かれている青龍をモチーフにしており、イメージカラーは「青」です。

## 節分を祝う ～土器と銅鐸～

冬と春の境目が、節分です。現在は、節分という2月の豆まきが思い浮かびますが、古来、この2月の節分以外にも、立春・立夏・立秋・立冬の前日が、それぞれ節分でした。

弥生時代以降、米づくりが盛んになると、農事に関する重要性からか、2月の節分を最も重要な節分としたようです。「コメ」=稲の株が分かれて増える=稲が多く実る=祖先の霊(イネの霊)が増え続けることをイメージしたのかもしれない。

古墳時代前期の土器に、籠目の付いた壺や甕類があり、栃木県内でも出土例があります。甕や壺にかぶせるカバーとして編まれた籠の跡だと思われます。

これらの土器は希少なものであったようで、出土点数も少ないことから、特別に重要なものとして取り扱われたのではないかと推定されています。確証はありませんが、種もみなど、古代の人々にとって貴重なものを収納していたのではないのでしょうか。

また、弥生時代の稲作にまつわる祭器だったと考えられている銅鐸の表面には、稲作や収穫に関わりのある絵が描かれています。

有名なものに、神戸市灘区の桜ヶ丘遺跡で発見された14個の銅鐸と7本の銅戈があり、いず

れも国宝に指定されています。そのなかの5号銅鐸と呼ばれるものには、鳥や鹿、魚、スッポン、カエル、ヘビ、トンボ、カマキリ、弓を片手に鹿の頭を押さえる人、脱穀する人、高床倉庫が描かれています。

あまり知られていませんが、下野市に隣接する小山市は、銅鐸が出土する日本列島最北端の地です。小山市出土の銅鐸は小さいため、絵画は描かれていません。

銅鐸は吊り下げて、舌と呼ばれる棒状のものを中に吊るして鐘のように鳴らしました。本体と舌が接触する部分に、摩擦の痕跡やすり減った跡があるものも確認されています。

その後、銅鐸は巨大になります。中には高さがおよそ70cmになるものもあり、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」に変化していったことが分かります。大きなものには、縁の部分に渦巻文様がついた「飾耳」と呼ばれる装飾が付きま

これらの大きな銅鐸は滋賀県野洲市で発見されています。青銅製で、造られて2,000年近く経っているため緑青色になっていますが、造られた当初は新品の10円玉の色をしていたようです。

春の訪れや秋の収穫を祝う祭りで飾られたのかもしれないですね。